

黒上正一郎著

『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』班別輪読のための導入講義

（財）国民文化研究会理事長  
前亜細亜大学教授

小田村寅二郎

一、この合宿教室は、今年で三十年目を迎へるが、毎年、参加者諸君にとっては、大変むづかしくて、また、取りつきにくいやうに見えるこの書物を、なぜ「輪読書」に取り上げてきたのか、その理由について先づお話しする。

（一）「輪読」の行ひ方と、その学問上の意義。

（二）「輪読」するに値ひする書物とは、——その資格と条件について。

二、三十歳の若さで病歿（昭和五年九月）された著者・黒上正一郎といふ方について、——特に、学問とらふものに取り組まれたその青年期における人生姿勢について。

三、この書物の内容について

（一）全頁を通じて、著者がその心の奥に宿してゐる情意・情操と、自分の祖国である日本の歴史に取組む基本姿勢に、我々が以て範とすべきものが随所に見受けられること、——それは、この書物を読み学ぶ者各々をして、自らの生きてゆく道、学問を志向する道への深い示唆、さらには、各自の生涯を通じての各々の人生をより生き甲斐あるものへ、と導いてくれるよすがにもなることなのだが——。

（二）著者が聖徳太子と明治天皇のお二方を讃仰さんじやうされたことについて、——それはなぜか——。

（三）東洋文化・西洋文化の双方を見事に攝取せつしゆ（よい所を取り入れること）して今日に到つてゐるのがわが日本国であるので、その東西両洋文化を攝取した時期に、国民に率先してこれら外来文化に対せられた枢要の地位にあられたこの二方を、われら日本国民が心から仰ぐ姿勢を整へる所にこそ、日本人として、学問（各分化学科としての学問ではなく、国家に生きる国民たるものが総合的に求める最も根本的な学問）の出発点があることを、このことについて著者・黒上正一郎といふ青年学徒は、強い信念を以て指摘してゐること。

（四）本書は、著者が、日本が東・西両洋文化の攝取に成功したとの観点に立つて、しかも、その一つの東洋文化を、はるか大昔（今から一三五〇年前）に聖徳太子が、どのやうな姿勢で攝取しようとなされたか、その点、外来文化に相對された太子のお心組みを、心からお慕ひ申し上げ、また、そのお心を仰ぎながら、この書物の著述がなされてゐること——それをいま我々が心をこめて学ぶ、と

いふことは、現代に生きる我々が、全世界の人々と深い交りを持ちつつ生活してゐる折々に、我々もまた、色々な異国人との交流、異国文化との接触到常時従事してゐることと合せ考へれば、我々現代に生きる者たちにとつて、大変に重要な「異国文化攝取に當つての基準と心構へ」とを教へてくれることにもなるはずである。

曰　そこで、この書物の「輪読」で大切なことは何か、について。

(イ) 著者が、聖徳太子の御人格の根本をなす「太子の信仰思想」の本質に向かつて、著者の全身身を傾けつつ、どのやうに迫つていかれたか、そのことを学ぶこと、味はふこと、更に各自の心のうちに感受していくこと、それが「輪読」ならでは、の勉強となる。

(ロ) 著者の筆の運びを正確に辿りながら、その文脈にあふれ出てゐるリズム（それは、いふまでもなく、著者自身がこの世にその人生を送るに當つて心にこめられた生の息吹ともいふべきものであるが）、そのリズム、抑揚を、素直にお互ひの「輪読」の「音声」の中に、また「その音声のリズム、抑揚」の中に再現しながら、著者の生き生きとした生命を、現実に甦らせながら、著者の心を憶念（心に思ひ浮べながら偲ぶこと）し得るならば、「輪読」の目的は達せられた、と言へよう。

そのことを、学問的な用語を以て説明すると、著者の人生体験を我々が再び同じやうに「追体験する」といふことになり、同時に聖徳太子の人生体験を我々が「追体験させていただける」ことにもなる。ちなみに言ふが、「追体験による勉強」こそ、学問の名に値する最も基本的な姿勢といふべきものである。

四、この「輪読導入講義」の時間帯で取り上げる「輪読」の具体的個所。

それは、ここに記さないこととする。私の講義においてはじめて指示をする。さうしないと、班長さんたちだけが先に勉強してしまふから、新鮮な気持ちで全員が取組むのを妨げるかもしれないので。

五、各班ごとに行ふ「輪読」の個所は、数個所の中から一つを選んで取り組んでほしい。その数個所についてもまた、私の講義の終りの段階で指示をする。